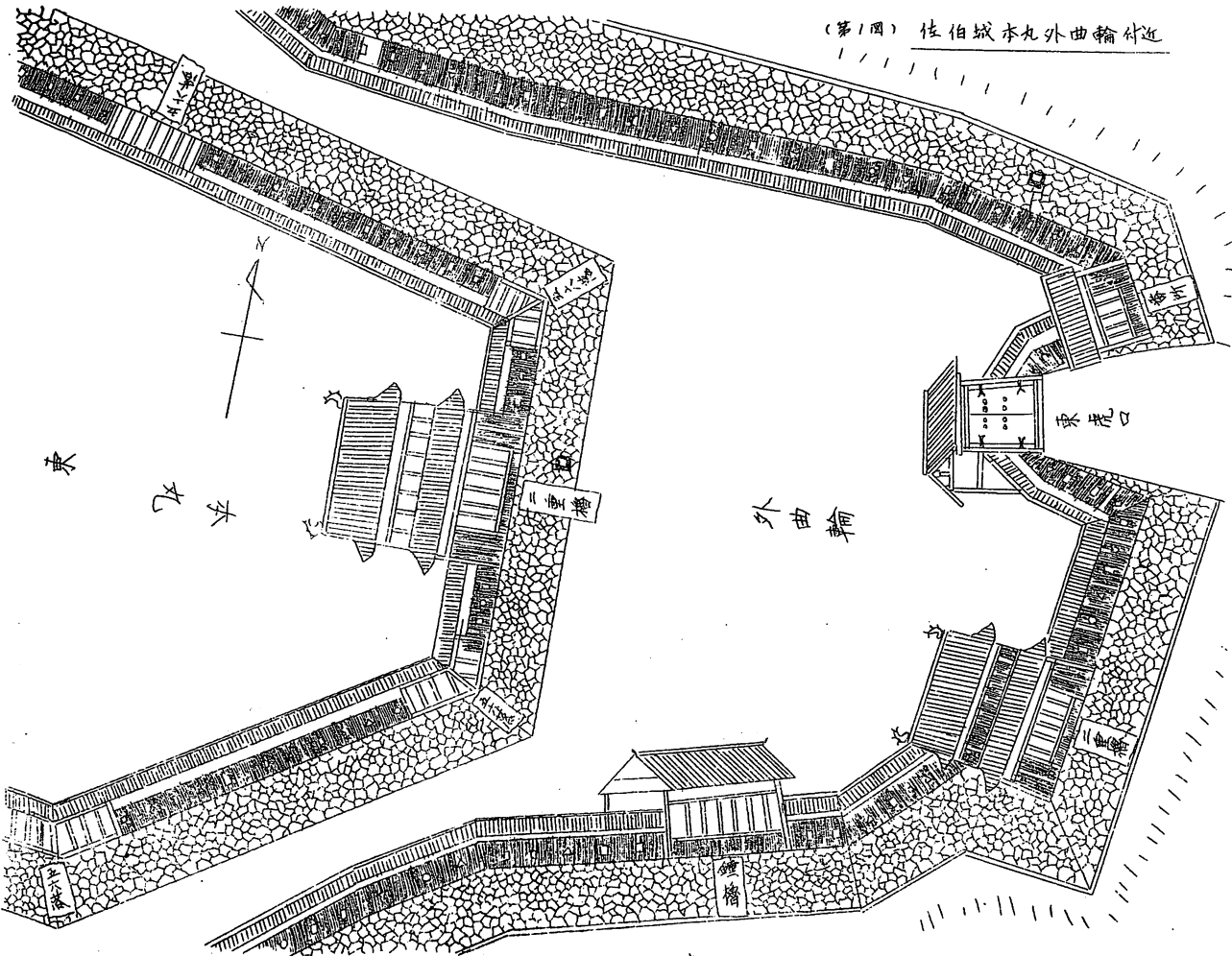


(第1圖) 佐伯城本丸外曲輪付近



研究

佐伯城絵圖解説

一 市教育委員、山城部分圖について

会員 小野 英 治

本圖は、佐伯市教育委員会所蔵の山城部分図を、忠実（原寸大）に写したものの一部である。
 この種の図は、筆者の知る限りでは本國の外に二葉あつて、それは毛利家蔵（池秀藤内毛利家會館）と、吉田家にもかつて伝來していたようであるが、これは現在行方不明で、写真のみ残されている。しかし、これは三葉ともには惜しいことではあるが、記入がない。
 大正三年共、きわめて類似した図であり、ほぼ同時

代の模倣を伝へるものと考へられるが、天守櫓などの描かれてない点などからして、慶長年間、毛利高政公創業當時のものではなく、恐らく佐伯城の大修理の完成した享保十四年（六代高慶公の代）以降、相違修正に至る間の図ではなからうかと筆者は推測している。
 さて、本圖の特徴とするところは、既に正確な平面図で、約二百分の一の縮尺で描かれているということである。
 そこに描かれた大建物も、外観を忠実に描きだしており、特に城門の四角金物、まじり金物、城門の構造等に至るまで明瞭にわかる程で、下見板敷の黒っぽい外観で統一した、往時の佐伯城の外容がよく理解出来るのである。
 次に本圖は、所々に文字の記入があるが、中でも本丸二重櫓の左右に「五六落」という書入は注目される。この五六落とは、その位置からいっても、圖から見て、東虎口というところを五六落とみてよいと推えられ、東虎口といふところを五六落と記入したのであろうか。

筆者は才大五六落という用語を見聞したことがない。恐らく佐伯城独自の呼称ではないかと思ふのであるが、これは、俗に手ごら石のことと判り石と稱することから、五六落と名付けたものであつたらうか。石落ではあまりにその目的がはつきりして好ましくないと考へ、秘密を設備といふことと、こゝろに記したものであつたらうかと臆測している。

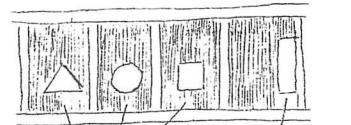
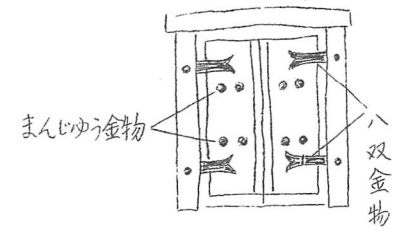
次に、東虎口の右石垣と、本丸二重櫓下石垣に□の印があるが、これは排水口を意味している。原因は、この印が四か所あるが、本丸二重櫓下石垣部分は、現在石段と交り若しく旧状と異なつていふから確認しようもないが、他の三分所は、すなはち筆者が確認するである。このことはいかにこの圖が小さな事まで詳細に記しているかといふ証明にもなり、ということと、他

おして知るべしで、廊下橋の構造に注目していただきたい。
 廊下橋の入口上の屋根が、宇佐神宮の晏橋に見るよう
 な、唐破風という手のこんだ作りと違って、いることであ
 る。このことは、下見板張りという、武骨で質素な外観
 の中であって、華やかさをこそと苦心した意匠として、
 注目すべきであらう。

次に、佐伯城の武備嚴たる点に注目したい。先ず城門
 の付近には必ず濬所があり、特に本丸にもつと近く、南
 虎口付近の、本丸に至るまでの道は常に濬雑で、容易に
 進入出来るとは思えない。そして矢狭間、鉄砲狭間が実
 に多く、それも黒板張の中からのぞくのであるから不気
 味である。

佐伯城の盛時における外観を伝えるものとして、この
 図は正に第一級のものと見えよう。ただ注意すべきは、
 書入れの建造物は、すべて城郭建築物に限られているとい
 うことである。当然あるべきところの土蔵・馬廄・二ノ

九御殿などの付属建物は、すべて省略している。城郭と
 しては、これが一般的な描き方であつたのである。



(以上)

以下、余白を生じた、限られた後面で、しかも
 それは佐伯城の絵図の下欄である。そこで筆者
 小野氏の複字の又変字とつけたまわつた私の言
 いたいことと、二、三解説する。
 (用紫)

- (一) まず前頁第一欄についてであるが、東虎口の冠木門
 のところ、大正時代の及び新設した登山道から最
 初第壹歩をこの城跡にふみ入れるところ。
 門の右手、香竹の跡に「歩歩碑」が建てている。
 左手二重櫓、鐘櫓の跡は、もちろんその建物はないが、
 ちやんと石畳が残っている。建物の大きさも推定でき
 る。今度城山に登られたら、たしかめてほしい。
- (二) 二重櫓跡の石置の上から、市街展望にもともろし
 く、ゆすこから展望をたかんでいる。それとも知らず、
 このあたりを本丸外曲輪、又は単に外曲輪と呼ぶ。
 城または塔の外をまわりとする土や石のかい、曲輪
 である。今はこの外曲輪のまん中から、本丸に分けて
 コンクリートの石段が、本丸三重櫓のところにけり出
 来ている。それは昭和三年、本丸に毛利神
 社を創建した際、家道として新築し、二
 重櫓跡の石置や石垣をこわして造つた
 ものである。
- (三) 上の第二回、本丸外曲輪から二ノ丸
 へかかる所を中心としている。昔はこゝよ
 うに、廊下橋によつてのみ、本丸は通
 けていたものである。
- (四) さて小野氏原田石垣の石がかなり大き
 くなる所を中心としている。原田にき
 るに当つてはそのまじりなく、石の
 大きさは四分の一ほど、小さくして一個の
 書くので大へんで、石がききやう何千とあ
 る、かつ、僅か三時間ほど石垣つくりには
 時間をとられた。
- (五) 城山石垣、實際は千も二千もない、何号
 という多量の石を、こゝからこゝへ集めて
 城山に登つて、この石垣に對する考察
 を欠いた。それは史跡城山と見え
 ことに在らぬ。そう私は思う。
- (六) 佐伯藩初代毛利高政がこの鶴屋城
 を築いたのは慶長年間、数年分けて
 築き上げたのが慶長十一年(一六〇六)。
 城であるから、落成という文字をそけ
 だが、それは忌め言葉で使わなかつたか。
 それははるか、皇曆三百七十年、城
 山の歴史の時を刻み、この石垣は今度
 亡びても残るのであらう。

佐伯城廊下橋付近

